

姫路の君主たち：松平家(1639-1649 & 1667-1682 & 1741-1749)

奥平松平忠明と「ヨーロッパの侵略」

1639年幕府は松平忠明(1583-1644)を姫路の新たな藩主に任命し、奈良の近くの大和郡山の職から彼を移動させた。徳川家康(1543-1616)の孫忠明は徳川一族親藩のうち最も高い地位出身だった。彼は3代将軍家光(1604-1651)の側近として仕えていた。

忠明の姫路への指名は、九州のキリスト教徒が幕府に対して武器を持って立ち上がった島原の乱(1637-1638)のすぐ後にやってきた。将軍と幕府幹部たちは日本のキリスト教徒たちを支持してヨーロッパの艦隊が長崎の南の港に上陸するのではないかと心配した。姫路は長崎と首都の間に位置していたので、侵略に対抗するため(一度も何も起こらなかったが)彼らはそこに経験豊かな司令官を置くこと、西日本のほかの大名を動員することを望んだ。忠明は1644年に亡くなり、4年後にほかの場所へ移動することになる忠弘(1631-1700)に家督を譲るまで姫路の支配者であった。姫路城の支配権は松平直基(1604-1648)に与えられたが、彼は途中(任地への道中)で死去し、榊原忠次(1605-1665)が1669年にあとを継いだ。

松平(結城)明矩：高い税と百姓一揆

徳川将軍家と血縁関係がある松平一族は江戸時代(1603-1867)多くの地方の藩主として仕えた。1667年、松平(結城)直矩(1642-1695)は姫路藩主になったが、1682年に交替させられた。徳川幕府は直矩に他の家との確執を理由に罰を与え、石高のカットと領地替えを何度も命じた。次に城を任された松平家の者は、直矩の孫である松平(結城)明矩(1713-1749)で、1741年に任命されたが、このとき松平家は経済的困窮にあえいでいた。

明矩は姫路の人々に重税を課すことで一家の財源を再び豊かにしようとした。その結果としての困難は天災によって悪化し、さらに明矩の死後百姓の間で反乱が起こった。兵隊が銃で反乱者を脅すことでそれを鎮めたが、それは江戸時代(1603-1867)に初めて一般人に銃が向けられたケースだった。

松平家(結城家)：転々とする封建君主

松平明矩(1713-1749)は、巨大な松平家の分家である結城家の一員で、徳川幕府の

藩主の領地替えの方針によって領地を転々とした。百年にわたり一家の誰かが姫路を3回統治するよう指名された。ただ城を統治したのはわずか二人の松平（結城）の君主だけだったが。

最初の指名：1648年

松平(結城)直基(1604-1648)は1648年に姫路の君主と名付けられたが、その職に就くための道中病気で亡くなった。彼の相続人である直矩（1642-1695）はわずか6歳で、このような重要な領土を治めるには若すぎた。そのため一家は現新潟県の越後村上に移された。

2度目の指名：1667年

直矩は1667年に姫路に戻った。それは概して言えば不運な職歴においては良い時期だった。越後高田の家中の確執に関係する罰として、直矩の石高は幕府によって大きく削減され、姫路から豊後日田へ異動させられていた。直矩は全部で6度異動させられ、姫路と越後村上のほかに、日田、陸奥白河、山形の藩主として務めを果たした。

3度目の指名：1741年

直矩の孫、明矩（1713-1749）は1741年に陸奥白河(現在の福島県)から姫路に移された。1749年の明矩の死後、彼の子であるまだ幼かった朝矩（1738-1768）は上野前橋(現在の群馬県)に移された。

松平（結城）直矩